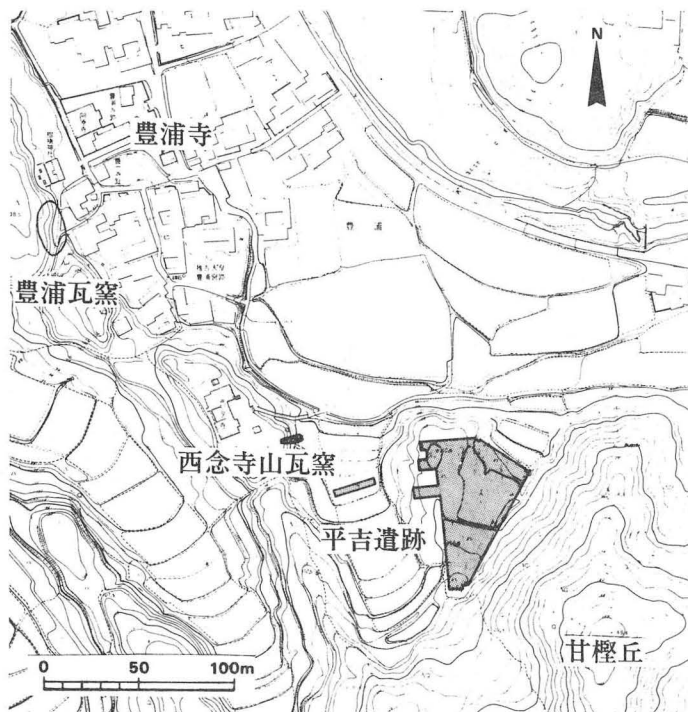


平吉遺跡の調査

(昭和52年5月～52年12月)

明日香村豊浦にある甘櫨丘は、飛鳥を一望できる景勝地である。昭和50年、閣議決定にもとずき飛鳥国営公園計画が立案され、その一つがこの甘櫨丘を中心とする地域に計画された。公園造成工事に先立ち、昭和51年春に予定地内の遺跡分布調査を行なった結果、甘櫨丘西麓にあたる通称平吉山（ひきちやま）及び平吉山とその西方の西念寺山との谷間に、飛鳥時代の土器や瓦の散布することが知られた。後者については公園造成の際の進入路にあたるため、昭和51年8月に発掘調査を実施したが、今回、甘櫨丘地区1号園地造成の事前調査として、平吉山を発掘することとなった。

調査地は展望台がある甘櫨丘の西麓に位置し、南北にのびる海拔110mの丘陵上にある。平地との比高は約14mで、調査前は八朔畑として大きく3段の段



平吉遺跡周辺地形図（1/4000）

状をなしつつ、南から北へゆるく傾斜する台地となっていた。この平吉山の西端部は東側よりも一段高くなっており、その西は急傾斜をなして谷に至っている。

飛鳥時代以前の平吉遺跡の旧地形は、西側に小さい丘陵尾根が北へのび、尾根と甘櫨丘裾との間は、かなりの勾配をもって傾斜する谷間となっている。検

出した各時期の遺構はこの谷間を埋め立て整地して構築されている。調査の結果明らかとなった基本堆積層序は、上から耕作土、床土、明褐色土、暗褐色土、含焼土暗褐色土、青灰粘土層で、部分的に、茶褐色粘土、褐色粘土、淡灰褐砂質土層などの間層を含んでいる。なお、調査面積は約 2500 m^2 である。

1. 遺 構

検出した主な遺構は掘立柱建物、塀、竪穴住居、井戸、池、炉跡、石列、木棺墓などである。これらは大きく3つの時期に分けられる。A期は竪穴住居の時期（6世紀）、B期は掘立柱建物等の時期（7・8世紀）、C期は木棺墓およびそれ以後（9世紀以降）である。

〔A期〕 竪穴住居SB 24がある。平面形は方形で東西 4.6 m 、南北 4.7 m の大きさである。壁は最丈約20 cm 遺存する。柱穴は床面で4個検出した。円形で直径30 cm 深さ30 cm 。柱穴間の距離は東西 2.2 m 、南北 2.4 m である。主軸は北で約16°東に振れる。周濠やカマド等の施設は検出されなかった。埋土から焼土・炭と共に7世紀中葉～後半の土器片が出土しているので、下限をこの時期に求められるが、周辺から6世紀末の土器が多く出土し、西壁外から6世紀後半の土器片を得たことからすると、更に遡るものとみられる。

〔B期〕 掘立柱建物8棟、塀5列、井戸2基、池1基、炉跡3基、石列2列等がある。掘立柱建物は、いずれも地山を削って整形するか、もしくは盛土整地して建てられており、その建物方位は検出面での丘陵の傾きとほぼ一致し、そのほとんどが南北棟の建物である。これは、基本的には丘陵尾根の方向により建物方位が決められ、その範囲内では地山を削ってまでも計画的に配置されたものと思われる。そこで、建物方位の差異によって分類すると、次の3類に大別される。Ⅰ類はほぼ方眼北から東へ5°30′振れたもの、Ⅱ類は北で20°前後東に振れるもの、Ⅲ期は北で30°～40°東に振れるものである。

Ⅰ類のSB 03は発掘区南端部で検出した4間（10.2 m ）×2間（4.2 m ）の南北棟建物で、柱穴は方形のものと柱筋方向に長方形のものがある。柱間は桁行 2.5 m 、梁行 2.1 m 等間である。柱穴は黄褐色粘土の地山に掘られているが、東北部では細かい層状の整地上に掘られている。SB 04は4間（9.0 m ）×2間

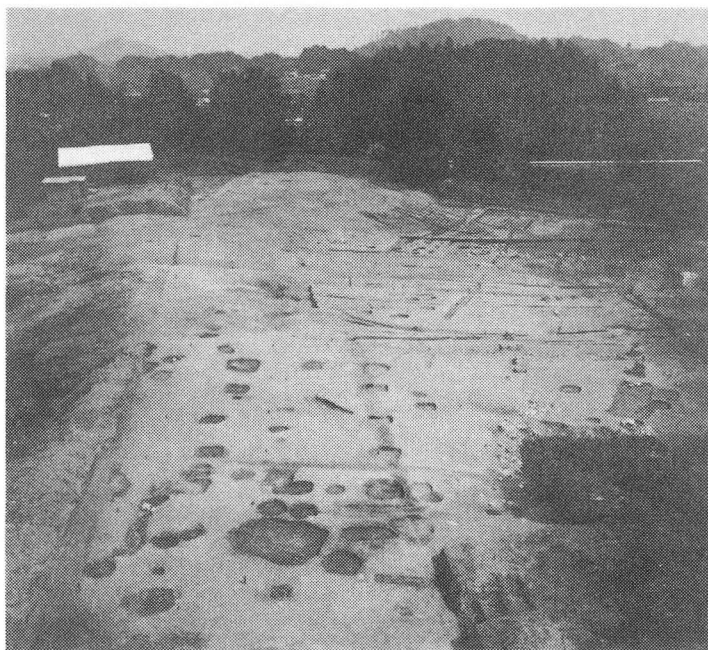
(4.9 m)の南北棟建物で、桁行の柱間は中央の2間が2.4 m、ほかが2.1 mで、梁行は2.4 m等間である。南妻柱穴がSB 03の西側柱列の柱穴を壊して掘られており、位置・規模が近似することからSB 03の建て替えと考えられる。これらの建物と組合う遺構としては、すぐ東に位置するSE 01、SG 02があげられる。SE 01はSG 02の下層で検出した縦板組みの井戸である。掘方は一辺1.8 m 深さ2.5 mである。埋土から8世紀後半の土器と飛鳥・白鳳時代の軒瓦が出土した。SG 02はSE 01を埋めて底に小石を敷いた池である。直径6 m × 4 mの不整円形で、埋土上層から9世紀代の灰釉瓶子が出土した。

SA 15は発掘区の中央を東西に横切る塀で、8間(16.5 m)分検出した。柱穴は方1.0 mの掘方で径0.3 mの柱痕跡を残すものが多い。柱間は西端だけが2.4 mであとは2.0 m強である。ただ、柱筋を東西にそれぞれ2.0 mの柱割りで延長すると、東では3間、西では4間の所に同規模の柱穴があり、都合15間(30.8 m)の塀になる可能性がある。15間とした場合、両端の柱穴と中央の柱穴との比高は2 mにおよぶ。また8間と考えた場合でも約0.7 mの比高がある。SB 29は西方の尾根上にある桁行4間(8.4 m)の南北棟建物で、梁行は南では2間(4.2 m)であるが、北では3間割りにしており、北妻入りの建物とみられる。柱穴は方0.7 mで西側柱の中央を欠く。柱間は桁行と南妻が2.1 m等間、北妻は1.4 m等間である。

I 類の掘立柱建物はSA 15により南北に二分された配置となり、北側については西辺にSB 29があるだけである。

II 類に属する掘立柱建物にはSB 05・21・25・30、SA 09・10・20・31がある。SB 05は発掘区のほぼ中央で西側の丘陵尾根のすぐ東に建つ4間(8.1 m) × 2間(4.8 m)の南北棟で、柱間は桁行2.0 m 梁行2.4 m等間である。建物の西側と南側は、丘陵尾根(花崗岩盤)を建物方位に合わせて深く削り取り、そのすぐ際に柱穴を穿つ。このため、西側柱と南妻柱は花崗岩盤を、東側柱と北妻柱は整地土を切り込んでいる。柱穴検出面と西側の地山の高い所とでは約1.8 mの比高があり、建物の西側に壁がそそり立つことになる。旧遺構面をどう考えるべきかは検討の余地がある。SA 09はSB 05の北にある2間(6.0 m)の東西塀

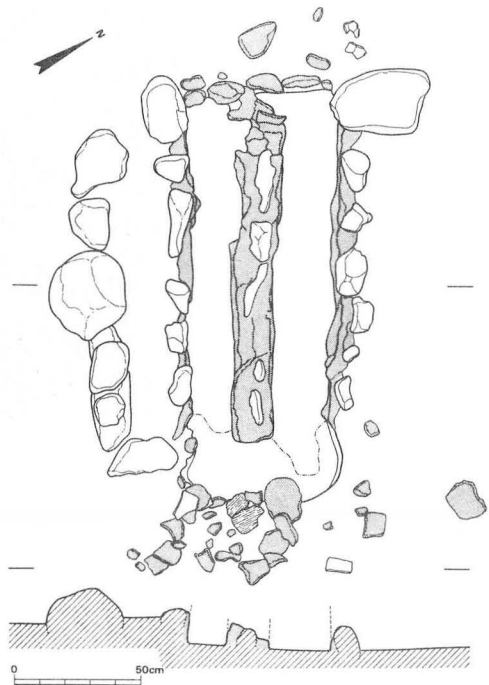
で、西端で北折し、2間（6.1 m）の南北塀SA10となる。共に柱間が3.0 m であり、炉跡SX11・12・13の西と南を区画するものとみられる。SB21は竪穴住居SB24の北にある建物で、5間（10.5 m）×2間（4.5 m）の南北棟建物である。柱穴は0.7～0.9 mの方形で、南妻と東南隅の柱穴がSB24の北壁をこわして穿たれている。また、北妻柱がSB26の東側柱と重複し、SB26よりも古い建物であることがわかる。他の柱穴も多くは重複する柱穴をもち、この建物より古い柱穴がある。柱間は桁行2.1 m、梁行2.25 m等間である。なお、遺構図には図示しなかったが、西南隅柱穴の西1.5 mと南1.4 mの所には、それぞれ西側柱列・南妻柱列に並行する石列があり共に3.5 m分検出した。柱穴検出面と石列検出面とは、間層の焼土面を含む厚さ約50 cmの整地土を介しており、石列がこの建物に関係するものとすれば、柱をたてたのちに周辺を整地し低い基壇状にしたものの縁辺を画するものと考えられる。SA20はSB21の東側柱から東6 mの所を建物と並行して走る南北塀で、5間（10.5 m）分検出した。柱穴は方0.7 mでほとんどの柱穴に柱痕跡を残す。柱間は2.1 m等間で、それぞれSB21の側柱の柱割と一致する。この塀の東1.2 mには石列SX18がある。途中抜けている



調査地全景（南から）

が南北に6個4.8 m分検出した。石列は石の東面をそろえて並べられている。これら一群の建物の東を限るものであろう。SB25は、SB21とSA20の間にある3間（5.5 m）×2間（3.0 m）の南北棟建物である。柱間は桁行1.8 m 梁行1.5 m等間である。SB30は発掘区北端にある2間

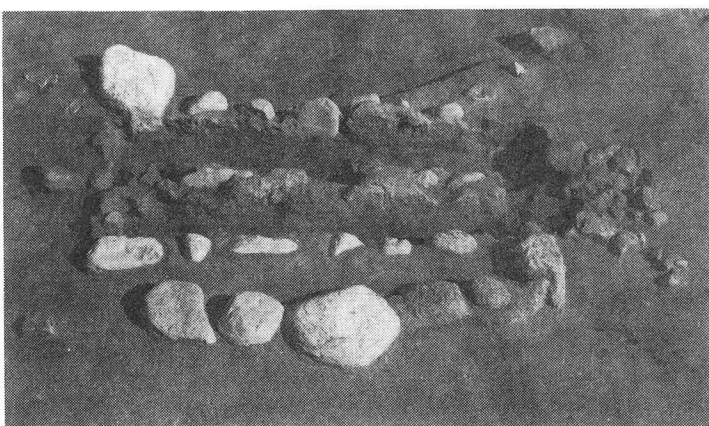
(4.3 m) × 2 間 (2.5 m) の総柱の東
西棟で倉庫と考えられる。柱穴は方
0.7 m ほどで柱間は桁行 2.1 m 強、梁
行 1.2 m 強である。SA 31 は SB 30 の西
を南北に走る塀で、SB 21 の北妻柱に取
りつく。7 間 (14.7 m) 分まで検出した
が、更に北にのびる。柱穴は方 1.1 m
と大きく、重複する柱穴の中でも最も
古く検出したものが多い。柱間は 2.1 m
等間である。Ⅱ類の掘立柱建物はこの
SA 31 と SB 05 の西側柱列を基線として
いるようである。SB 05 の柱穴が岩
盤を掘鑿して建てられているのは、こ
れによるものであろう。Ⅱ類の掘立柱



炉跡 SX12 実測図 (1/30)

建物と関連する他の遺構には、SX 06・07・18・19・32・14 などの石列及び集
石遺構がある。石列 SX 18・19・32 は谷筋をせき止めて排水護岸をした池状遺構
を構成し、SX 18 はその排水施設、SX 19・32 は西岸にあたる。池状遺構の西岸は、
SX 20 の東では建物に並行した直線をなしている。谷の上流では、谷底に石を集
め導水とし (SX 06)、そこへ流れ入ませるために石組溝 (SX 07) を配してい
る。埋土は淡青灰色砂土で、7 世紀後半の土器が含まれている。炉址 SX 11・
12・13 は、SA 09・10 に囲まれており、Ⅱ類に関連する遺構とみられる。3 基
とも同規模のもので、SX 12 は長辺 1.6 m 短辺 0.6 m の長方形で、長辺は河原石
を芯にし内側をスサ入り粘土で被覆した壁が約 12 cm の高さで残っている。炉内
は、石を両側から粘土で被覆した断面方形の仕切で縦に二分している。南の壁
の外には、もう一列石列を配しているが、北にはない。埋土には焼土塊と共に
暗褐色微砂が間層をはさんで堆積し、最下の床面は比較的硬く焼けている。短
辺には焼土塊があるだけで、特に東の短辺には多くの焼土塊・木炭片があり、
またフィゴ羽口の挿入口と思われる中空の焼土塊もあって焚口とみられる。

SX11・13も炉内中央の間仕切のない点を除けばほぼ同様の規模・構造である。炉内からは7世紀代の土器片が出土したが、スラッグ類がなく、また鍛冶遺構としても大型で石を配するなど類例がなく、



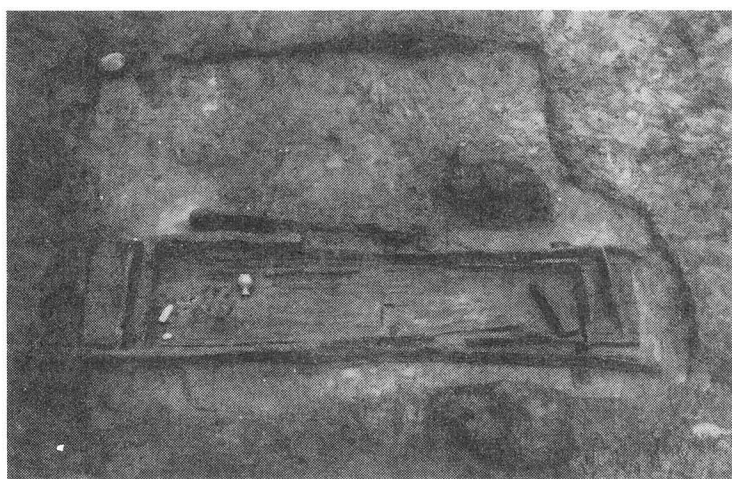
炉跡SX12全景（南から）

不明な点が多い。ただ、周辺の焼土塊の中に径約20cmの平底のルッポ様のものや金属の溶融したものがあり鉄・銅製品の製造に関わるものであろう。

Ⅲ類の掘立柱建物はSB26だけである。3間（6.3m）×2間（4.2m）の南北棟建物で、方0.7mの柱穴のほとんどに柱痕跡がある。SB20・SA31の柱穴と重複し、いずれよりも新しい建物であることがわかる。柱間は桁行梁行とも2.1m等間である。

以上のように、B期3類の掘立柱建物は、Ⅰ類が奈良末～平安初を下限とし、Ⅱ類が7世紀後半を上限とするものとみられる。Ⅲ類については、Ⅱ類より新しいが、Ⅰ類との関係は明らかでない。

〔C期〕 木棺墓SX16と鎌倉時代の土壇SK36及び近世の石垣がある。木棺墓についてのみふれておく。この木棺墓は、木棺とそれをおおう木槨とも呼ぶべき枠組を持っている。墓壇は長辺2.7m短辺1.4mの略長方形の平面を呈し、主軸を東45°南におく。墓壇の上部はすでに削平され、盛土の有無は明らかでない。墓壇内には、その北側に片寄せて棺材及び副葬品が埋置されていた。木棺は長さ186cm、幅40cm、現存高10cm内外の内寸法をもち、棺材の厚みは約2cmである。棺は長辺側板のあいだに木口側板をはさみ釘留めする構造で、長辺側板端は木口面にそろう。棺東端部に遺存した鉄釘のうち2点は両長辺側板と木口側板とを、1点は木口側板と底板とを固定したものである。棺の内底には棺蓋の残片かとみられる棺材が落ち込んでいた。棺底東半部には冠・石帯・砥石・土

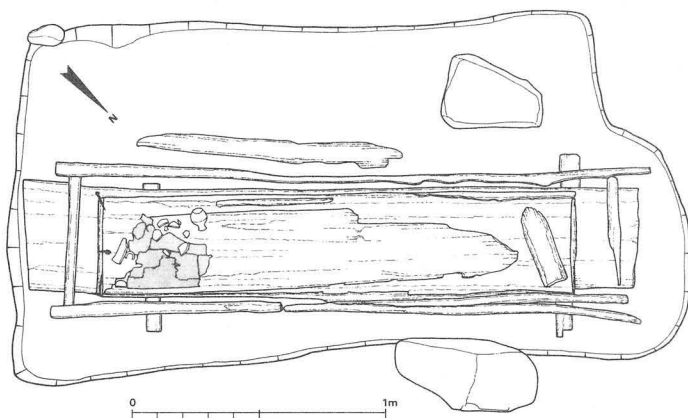


木棺蓋 S X 16 全景（北東から）

器などの副葬品が、西端部には角材がみとめられた。角材については、棺底板に密着しており棺内に納められた可能性が強いが、東端の遺物は棺蓋より上部で出土したので、棺蓋上面に副葬されたものと

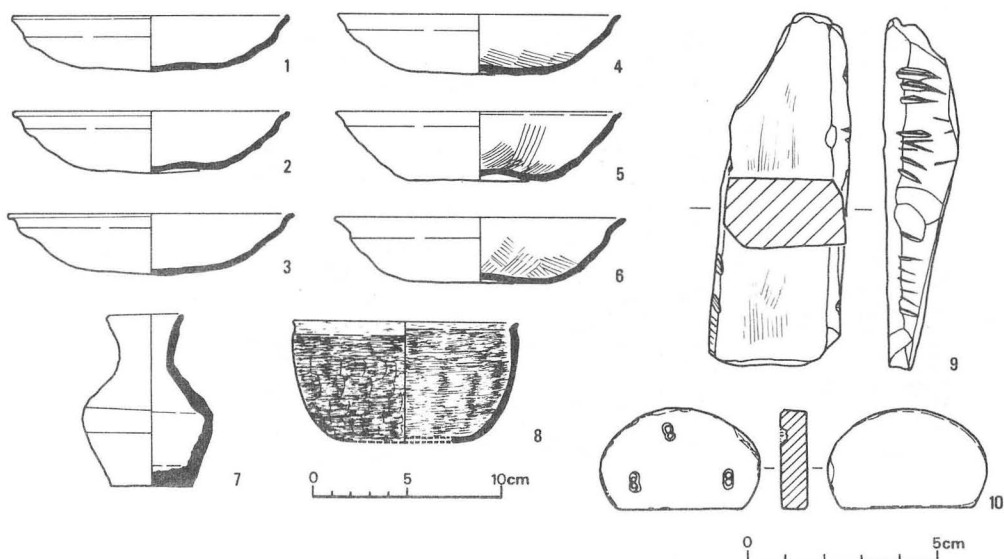
と理解できる。なお副葬品の出土状況からみて遺骸は東枕に葬られたものであろう。

木槨は棺より一廻り大きい程度の小規模なもので、長さ 212 cm、幅 55 cm、現存高 15 cm の内寸法をもつ。槨の枠組は長辺側板のあいだに木口側板をはさみ、長辺側板端が木口面よりも突出する構造をもつが、釘留めの有無は明らかでない。長辺側板全長は 235 cm 前後をはかる。槨の底面には、棺台の役割をも果す長さ 244 cm、幅 42 cm、厚さ 2.4 cm の板材があり、更にこの下に、長さ 60～70 cm の角材 3 本が東・中・西にわたされ、底板埋置の際の安定をはかっている。槨の上部は腐朽し詳細をうかがえないが、木槨南側に遺存する小板材を槨蓋の遺材とすると、槨内の



木棺蓋 S X 16 実測図（1/30）

復原高は約 50 cm ほどとなる。この板材の北側、棺の上部で土師器 6 点を検出したが、これは冠や石帯などと比べると明らかに検出面に差があり、槨上の副葬品



木棺蓋 S X 16 出土遺物 (1～8: 1/4, 9～10: 1/2)

と考えられる。土師器坏 A は 6 点あり (1～6) いずれも口径 14.5 cm 器高 3.3 cm 前後で、調整手法から、口縁部をヨコナデ、底部内面をナデ調整するもの (1～3) と底部内面をハケ調整したのちナデるもの (4～6) に区分される。しかし副葬時両者の別は意識されていない。木棺上面の遺物には須恵器瓶子、黒色土器鉢、石帯、砥石、羅の破片および漆器片がある。須恵器瓶子 (7) は口径 3.8 cm、器高 9 cm で糸切底をもつ。黒色土器鉢 A (8) は口径 11.8 cm、器高 6.5 cm で体部外面上 3 分の 1 と内面が黒色を呈する。石帯丸軋 (10) は縦 2.7 cm、横 4.2 cm、厚さ 0.7 cm の片岩製で、裏面に 2 孔 1 組の潜り孔を 3 対穿っている。砥石 (9) は縦 9.4 cm、横 3.3 cm の粘板石製であり一端が欠ける。羅の破片は冠の一部と思われるが、その全形は明らかでない。また羅の周辺には漆器片が存在するから、おそらく冠は漆器の箱に収納されたものであろう。これら多彩な副葬品はいずれもの世紀前半頃のもので、これによって木棺墓の年代がうかがえる。なお、木棺および木槨は杉材を用いている (巻末復原図参照)。

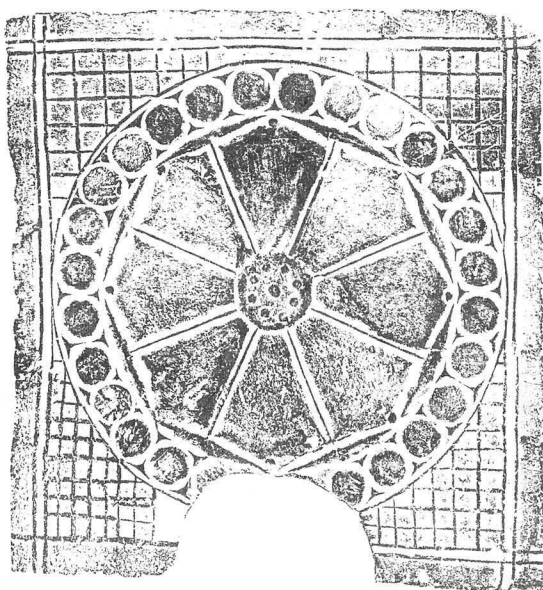
2. 遺物

出土遺物には土器類・瓦類・銅製品・鉄製品・土製品・炉跡関係遺物があるが前述した木棺墓出土遺物などのほかは、大半が包含層の遺物である。

土器類は、5世紀中葉の埴輪から9世紀代のものまでである。整理中のため充分でないが、年代的には、6世紀後半、7世紀後半、奈良時代のものが多く、また奈良時代のものでは土師器坏皿類の多いことが目につく。

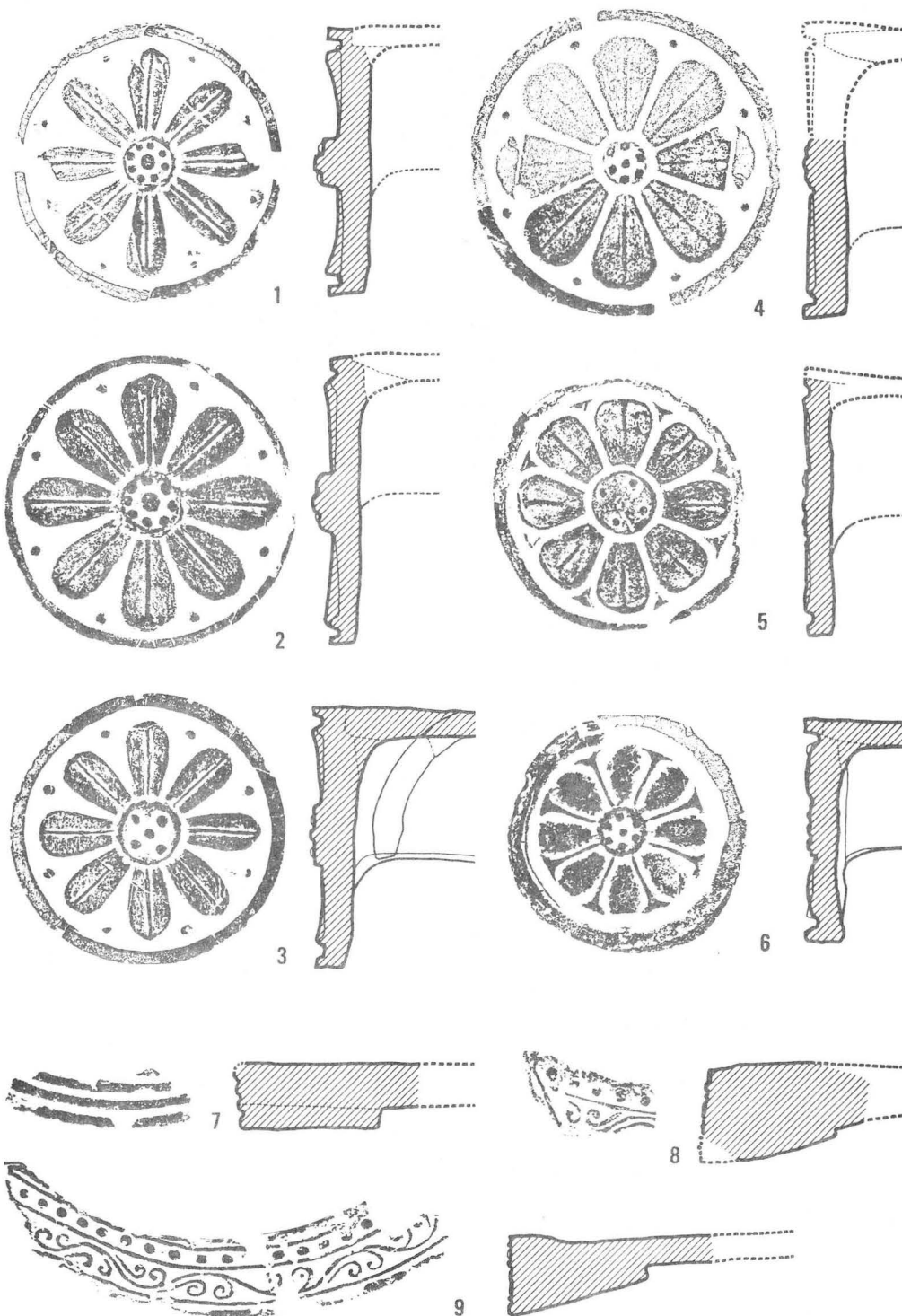
瓦類は東の谷筋、中でも石列SX 06からSX 18にかけての包含層から出土した。

軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦があり、丸瓦・平瓦が大部分である。



鬼板復原図(1/5)

道具瓦には槿瓦・鬼板・熨斗瓦・隅平瓦などがある。軒丸瓦はすべて飛鳥様式の単弁蓮華文でいわゆる高句麗系の瓦と百済系の瓦とがある。高句麗系の瓦はいずれも素縁単弁8弁蓮花文であるが、大きく三群ある。Ⅰは弁端円形で弁間に珠点を配するもので、4種類ある。a(1)は弁中央に細い凸線の稜をつけた狭長厚内の花卉で、中房は高く突出し、1+8の蓮子を配す。豊浦寺出土例と同範であり、2点出土。b(2)は大ぶりで、花卉がやや広くてうすい。3点出土。cはbに似るが、花卉がやや狭く丸味をおびている点異なる。小墾田宮推定地に類例がある。1点出土。d(3)は中房径がやや大きく、突出の度合も少ない。蓮子は1+4。花卉幅は狭いが余り長くない。Ⅱは、弁間に珠点を配し弁端が尖形のもので3種類、各1点がある。aは弁が狭く、舟先形に尖る。豊浦寺跡に類例がある。bは大ぶりで丸味のある弁端が僅かに尖る。cはaに似た弁形だが弁中央が鎬状を呈する。豊浦寺跡から出土した類例によれば、中房は高く突出し、1+5の蓮子を配する。Ⅲは中房周囲に凹線をめぐらし、全体に扁平なもので4種類ある。a(4)は広闊扁平な弁で弁間に珠点を配する。中房は小さく蓮子は1+6。2点出土。豊浦寺跡に同范例がある。bは広く短い弁で弁中央の稜が途中で終わっている。弁間には楔形の間弁を配する。1点出土。c(5)は小型



軒瓦実測図 (1/4)

で楔形の間弁をもち、短く巾広な弁の先端が少し反転する。中房径は大きく $1 + 4$ の小さい蓮子をもつ。3点出土。和田廃寺に同范例がある。d は蓮弁が幅広く扁平で周縁が反転する。楔形の間弁の先が尖る。1点出土。

いわゆる百済系のものは4種類ある。a はいわゆる先端切込み型式の素弁単弁10弁で飛鳥寺創建瓦（I 型式）と同范の可能性はある。b は間弁が大きく高く、円形の弁端が強く反転する素縁単弁8弁蓮華文のもの。1点。軽池北遺跡出土例と類似する。c は豊浦寺・和田廃寺出土例と同范のいわゆる角端点珠型式の素縁単弁9弁蓮花文軒丸瓦で、弁間の細い界線が右へカーブするのが特徴的である。5点出土。丸瓦部は玉縁がつき長さ約35cm。玉縁の内面をヘラケズリする。d (6) は、面径の小さい素縁単弁8弁蓮花文で、弁は厚肉でてりむくりが著しい。中房には $1 + 6$ の蓮子を配す。文様の鮮明なものが少なく、多くは瓦当面に手掌を押しつけ、外縁をヘラ削りしている。丸瓦部は粘土紐巻き上げ造りの行基式である。同范例は小墾田宮推定地にある。

軒平瓦は、四重弧文軒平瓦(7)2点と藤原宮式の6641 - Ab (9), c (8) 各1点がある。これらに対応する軒丸瓦は出土していない。

熨斗瓦には、平瓦を半截したものと平板に作ったものの2種類がある。

椀瓦は1点のみで、弁端が反転隆起するてりむくりのある弁で8弁とみられる。小墾田宮推定地出土例に類以する。

蓮華文の鬼板は同范のもの4個体分、12点ある。縦38cm、横36cm、厚さ2.2cmのやや縦長の方形板の中央に角端点珠形式の蓮華文8葉を配し、そのまわりには大粒の円珠文26をめぐらす。中房は半球状を呈し、蓮子は $1 + 8$ 。中房の蓮子を中心に蓮弁や円珠文を厳密に割りつけている。四隅の空隙は格子文とするが、格子文の大きさや単位数はすべて異なる。また四周の界線は二重線とするが、左下のみ一重線であり、内区のような割りつけの厳密さはない。鬼板の中央下端には円形の削りをいれる。豊浦寺塔跡出土例と同范である。また岡山県末、奥瓦窯出土例とは円珠文の部分にみられる范の彫りキズが一致し、同范の可能性が強い。

丸・平瓦は整理中であり、飛鳥時代の特徴を示す丸・平瓦について2, 3述

べておこう。

丸瓦は大半が行基丸瓦であり、玉縁丸瓦は約1割程度である。全体に軟質薄手で焼きがあまい。製作技法は多くが粘土板桶巻作りの痕跡を示すが、百済系軒丸瓦d(6)に対応する丸瓦は粘土紐桶巻作りである。凸面の調整は全面をヘラ削りするため明らかではない。凹面は側縁を浅く面取りする例が多い。玉縁式は凹面の玉縁部分を例外なくヘラ削りする。長さは行基式、玉縁式いずれも40cm程度と30cm程度の二種類がある。平瓦は丸瓦同様軟質薄手の瓦が多い。製作技法は粘土板桶巻作りの痕跡のみ確認した。凸面の調整は全面ヘラ削りのため不詳だが、縄叩きの痕跡とみられる例がある。側面はヘラ削りし、側縁を面取りする例が多いが、粘土円筒の分割破面を残す例もみられる。

瓦は豊浦寺出土品と同范品や共通するものが多く、豊浦寺との密接な関連性が窺える。

金属製品には、銅鈴（径3cm）、銅鋌2種、小銅板及び鉄製刀子、鉄釘がある。土製品では円面硯1の他に土馬の多いことが注目される。耳や鞍を表現した大型のものと小型のものがあり、約60点出土した。鍛冶用品としてフイゴ羽口6点、ルツボ大小3点があり、他に多量のスサ入りの焼土塊があった。

3. まとめ

今回の調査の結果、甘樫丘西麓の小台地上に立地する平吉遺跡には、6世紀から9世紀の遺構が存在することが明らかになった。遺構は複雑な様相を示しており、現段階では十分に明らかになったとは言い難いが、ここでは遺跡の変遷過程をたどりつつ、2・3の問題点にふれておきたい。

平吉遺跡は古墳時代中期に始まるものと考えられる。その時期の遺構は検出されていないが、発掘区東南から比較的多量の埴輪片が出土し、それらは5世紀後半から6世紀初頭のものである。円筒埴輪のほかに家・盾・蓋などの形象埴輪があり、付近に、古墳あるいは祭祀遺跡の存在した可能性が高い。

6世紀末頃には、竪穴住居が営まれる。竪穴住居は一基検出したにとどまるが、この時期の土器が多量に出土しているので、ほかにも存在していたものであろう。なお付近では小墾田宮推定地で4基知られている。

7世紀前半では、豊浦寺出土例と共通する多種の飛鳥時代の軒瓦が出土しているが、関連する遺構は明らかでない。堂塔が存在したが破壊された場合やこの地域が谷間になっているので、この地域の整地土盛の際に豊浦寺からこれらの瓦が持ち込まれた場合などが考えられるが、前者の場合は堂塔に関連する遺構あるいは礎石化粧石などが全く検出されていない点に問題があり、後者については、平地に近い豊浦寺から谷を越えてこの台地上まで運んでくる点に問題がある。ただどちらかといえば後者の可能性が高いであろう。いずれにせよ、豊浦寺と密接な関連をもっていた場所であったことは確かである。

7世紀後半には、谷筋を利用して池状遺構がつくられ、尾根の東斜面を整地してSB21を中心とした建物方位Ⅱ類の掘立柱建物が計画的に建てられている。その後、奈良時代には大規模な東西塀がつくられ、この地域を南北に二分している。塀の北側では関連する遺構が明らかになっていないが、南側では、井戸SE01を東に配した掘立柱建物SB03が、池SG02を配した建物SB04に建替えられている。これらの掘立柱建物の性格を知りうる材料は多くないが、付近から塀に囲れた炉跡3基が検出されていることが注意される。3基の炉跡はその年代を決め難いが、これのみ単独で存在したとは考えにくく、また炉跡を囲む塀が、Ⅱ類の掘立柱建物に含まれ、下層を走る石列も同じ方位を示すことから、SB21を中心とするⅡ類の掘立柱建物群が工房もしくは何らかの関連をもつ建物群である可能性が高い。ただ、SB21は塀SA20を伴っており、単なる工房付属の建物とするには問題があろう。なお、奈良時代の遺物では、土馬が多数出土していること及び、完形に近い杯皿類の多い事が留意される。土馬は祈雨などにかかわった祭祀遺物とされている。祈雨の祭祀は、日本書紀・続日本紀によれば皇極年間以後、特に天武朝以後に国家的行事として行なわれた事がうかがわれ奈良時代を通じて、「名山大川」で行なわれていることを知りうる。古来、甘檜丘は神奈備山とされており、平吉遺跡はこの甘檜丘の西麓に位置するだけに、甘檜丘と一体となって、そうした祭祀の場として、しばしば使用されたことを示唆するものと言えよう。

9世紀前半の遺構は木棺墓だけである。この木棺墓は、木棺とそれをおおう

木槨とからなり、墓壇内に直接棺を埋置するいわゆる木棺直葬墓とは構造的に異なっている。それとともに、副葬品にも棺上と槨上の二者があり、とくに棺上のは被葬者が生前着用または使用した品々に限られるようであるから、両者には自ずと異なる性格が想定できる。棺上の副葬品の内容、特に冠・石帯・砥石からみると被葬者が、この甘檜丘周辺地域に本貫地をもつ官人であったことが想像され、また、この時期には平吉遺跡が墓域になっていたことが知られるのである。

以上のように、平吉遺跡は時代と共にさまざまに、性格とその帰属を変えているものと思われる。このことは、飛鳥地域の豪族の勢力圏や土地所有型態の問題及び土地利用の実態などとかかわる問題であり、この遺跡がなげかける課題は多いと言えよう。

注 1. 谷筋の砂層を検出したに留まった。

注 2. SX16は調査終了後周囲から掘り取って、現在保存処理をおこなっている。



平吉遺跡遺構配置図 (1/300)